

# 三月十一日の夜のはなし

(2011年9月作)

オノマリコ

人物：女 既婚。東京都の中野区でちいさな居酒屋をきりもりしている。

女、だらしなく椅子に座っている。

女 つまらなかった

女、だらしない姿勢のまま、語りだす。

女 いまわたしの目の前で起きていること。隣の男が前のめりに聞き入っていること。この空間の大多数の人たちがそうであること。わたしがそうでないこと。いろいろ。総じて

女 つまらなかった

女 友だちの子どもは頑張っていた。かわいい顔をしているけど、女優ってほどはかわいくないんじゃないかあ？と思っていたけど、舞台女優っていうのはかわいだけでないんだわ。きっと。しゃべるのをはじめて聞いた。しゃべるのが上手だった。うん。上手だった

女 あれはアナウンサーとはちがうのかな、ちょっとちがう気がするなあ、ニュー

スとかはあんな風にしゃべらない、でもあっちの背の高いちよつとお姉さんのほうが友だちの子供よりきれいだししゃべるのも上手、そんなことを思っているうちに寝た。よだれをたらしていた

女 これはわたしのくせで、よだれをたらすことが。目の前に頑張っている人がいるのに寝てしまうというのはとても悪い気がしたけど。電車とか映画館とか椅子に座って眠ると必ずよだれがたれる。顎が開いてしまうんだわ。結局は興味を失ってしまったんだと思う

女 目の前で起こっていることに

女 その日は友だちのムスメが出るっていう、ちよつとは有名な役者さんも出るっていう、そういう朗読劇を見にいった。や、聞きにいった。朗読劇だから。ちよつとおめかしして指輪つけてヒールのあるやつ履いて、ぴかぴかしたホールに朗読劇ってやつ、前みたいに地べたに二時間座らされるってことはないよね、笑いながら言ってる。友だち苦笑いだった、ほんと前にいったやつはひどかった、でも今度はちゃんと指定席で安心して、友だちと席が離れて、それもちよつと安心して、安心して核だの原発だの被爆だの話を聞きにいったのだ

女 興味ある。や、ほんとに。だって野菜食べられない魚食べられないお米食べたら汚染しました、それじゃあこまる。からだの中、すな時計のすな粒みたいに毒が積もっていくんじゃない、お店でだすものは九州とか四国中国関西原産のもの使うようにこころがけてる。それだけで。こう、雨とか降っていると、雨粒の一粒一粒に毒がほんの少し混じって。これからだによくないよな。平気で歩けちゃうけど。つまりもうすつげえ鈍感、なんだろうな。

お店のものはお客さんに毒たまったら嫌だし、どんなお客さんでもね。わたしのせいで死んじゃったら嫌だとかじゃなくて、もつと当たり前な。東北の皆さんにはごめんなさいだけど

女 興味あった。言い切れる。でもわたしはそうじゃない。なんだろう、調べてるんだけど、正確なんだろうけど。そんなこと知ってるよって話ばかりで

女 本当は知らないんだけど。放射能に詳しい人ボランティアに行く人が本当は怖くてふるえていたとか、酪農家の人危険区域だから何も検出されなかった牛乳を捨てなきゃいけなかったとか、中で働いている人たちもずっと被爆している人出してた今までに何人もの話。公表されてないとあかんだろそういうのは。でもされてなかったって知らなかった

女 火傷かとおもったら皮がはがれて、それがからだぜんぶに広がって、からだぜんぶの皮がはがれて、からだぜんぶがガーゼでおおわれて死んでいったって

女 こわいよ

女 でも、知っていた

女 こわい、ということを知っていた。よくない、ということを知っていた

女 だからわたしからよだれがたれた。よだれをたらして眠ってしまった

女 朗読劇がおわって、二時間もたった。そのあとその放射能の詳しい人のお話があるんだったけど、お店の準備があるから帰るといった。友だちにはムスメちゃん上手！って威勢よく。今回は台詞あつてよかったねって。それは言わなかったかも。言ったかも。覚えてない

女 中野に帰った。お店は中野にある。家もある。中野四丁目。ここらへんの地盤は東京では一番固いってお客さんが言っていた。これ、でも本当。あの地震の日。棚の上のお酒、いっぱいあつたけどどれ一つ倒れちゃいなかった

女、携帯電話を取り出す。

女 今日のオープンは 18:00 くらい。島寿司できます

女、携帯電話をしまう。

女 準備っていってもそんなにない。曇ビール冷やして。乾かしていた雑巾しまつて、新しい布巾を出して。小さいお店だからね。あと少し野菜切つとく。今日はお寿司だからごはんも炊いて。たたききゅうりでもつくりますかね

女 ホットスポットって観光地みたいだね

女 たたききゅうりは胡麻油だと思う。胡麻油がうまい。あとうちのはけっこう唐辛子入ってる。辛いほうがわたしの好み。旦那はちよつと減らせよっていうけどね。きゅうりの味がわからないって

女 あの日は春菊をおひたしにした

女 見たものにすぐ影響されんね。考えちゃう。原発。地震。放射能。あと紫外線。紫外線は冗談

女 みんなすげえ見てたな。こう、「意識の高い人たち」なんだろうな。わたしはダメだ。よだれたらして寝てた。あれ隣の人、気がついたかな。気がついたよな。嫌だわあ

女 あの日わたしは中野駅の近くにいた。近くっていうのは、つまり、つまり言うてしまうとスロットやってた。えへ。……妹と。妹がこっち出てきてて、母も来てて、母が美容院にいってる間、二人でスロット回してた

女 箱にこれくらい。それが三つぐらい溜まった。いいんじゃないの、これ。けっこうきてんじゃないの。いくらぐらいだろう。いい気分。その時、ゆれた

女 すぐにしゃがんで台のこののでつぱりの下に頭を入れながら。でもなにも落ちてこなかったと思う。ゆれ、大きくて、そういえば子どもころにこんな地震にあったことがある、地面、ぐるんぐるんゆれた。「お姉ちゃん」。妹がわたしの手を握った。スロットの下で。パチンコ屋の店員がみんなを外へと誘導した

女 外は晴れてた。遠くのビルがゆれていた。ながい。ながい。中にいる人は大丈夫だろうか。「大丈夫なの、あれ」妹が言った。「すごいね」と返した。まだ地面がヘンな感じ。「ゆれてる。」どっかでおっちゃんがいった。「ゆれてる。ゆれてる。」おばちゃんのわたしも返した。「ゆれてる。ゆれてる。ゆれてる。」それ

「ばっかりたくさん聞こえた

女 そのあと余震。何度もあって、パチンコ屋にいた人たちみんなちかくのコンクリ塀につかまって。お年寄りには「大丈夫」って声かけながら。そばにいるおっちゃんに「これはでかいね」って確かめながら。みんなわりと顔見知りみたいに、同士みたいに。だれかの携帯電話で震源地が東北であることを知った

女 お母ちゃんにはすぐ会えた。パチンコ屋のむかひの美容院だったから。もうカラー終わってるところで外に出て運がよかった。わたしと妹、まだ手をつないでた

女 ゆれてる。ゆれてる。ゆれてる。

女 20年ぶり。もしかしたら30年ぶり？でもそのときはそんなことは考えない。ずっと離れた。ずっと立ってるから疲れた。寒い。パチンコ屋の店員は「換金しときますんで」ってみんなに言ってくれた。だからみんな解散ってこと、そのころもう津波のニュースは入ってたのかな、そうかもしれない。ただ常識的に考えて津波ってあんなじゃないじゃん。妹と母はわたしん家に帰った。歩いて帰れるからよかった。旦那に電話をかけたけれど通じない。わたしはお店にいった。わたしのお店。ちいさなちいさな、だけどね。店

女、携帯電話を取り出す。

女 たたききゆうりあります。先着5名様くらい

女、携帯電話をしまう。

女 ぜんぜん無事やん。関西弁でいってしまふ。なんともないやん。へんな関西弁。  
わ りと心配していったのに肩すかしかい。灰皿倒れとる。それだけや  
ん。なんともなかったうちの店。わたしの店。棚の上のお酒、それ一つ倒れち  
やいない

女 なつかしいな

女、店開店の準備をしながら歌いだす。(愛の賛歌)。

女 あなたーのもえるてでー、わたしーをだきしめてー、  
ただふーたりーだけーでー、いきてーいーたーいーのー、

女 あの日は夜にお店を開けた。「みなさん大丈夫でしたか？今日は17:00にオープ  
ンします。顔見せてくださるとうれしいです。料理、お酒、いつもどおりあり  
ます。そうだ、店内無事でした。」パソコンから打つ。妹からメールがきてた。  
「テレビつけてる？すごかったよ、地震。電車全部ストップみたいね。みんな  
どうやって帰るんだろうね。」

女 テレビをつけた

短い沈黙。

女 ほんとほんと、なんともなかったのよ。灰皿がね、ちょっとぶっ壊れただけ。えー。中野駅よ。ちがうわよ。そう毎日毎日パチンコやってるわけじゃないって。スロット。酒瓶がね、そう、そういうお店はたいへんよねえ。オープンしたて。可哀想。パチンコとスロットじゃ全然ちがうわよお。なに飲む？

女 平気よお、あいつなら。出張静岡。帰って来れないでしょ。電話つながんない。今はね、携帯はダメね。なに食べる？大繁盛だった。常連さんみんな。友だちも連れてきてた。交通機関がマヒして、帰れなくなっちゃった友だち。小田原？いつも小田原から通ってるの？春菊きらい？佐倉？湖あったわよね、たしか。ちよつとちよつと、どうよ、東北

女 みなさん、ご家族は大丈夫

女 ……だれかなんか歌う？なんでもいいよ。好きなの。お前、歌いなよ。得意でしょー演歌。ね、わたし今日妹と手をつないじゃったわよ。20年ぶりよ。もしかしたら30年ぶり。こわかったってわけじゃないけどさ、なんか。わたし？わたししかい。みんな歌わないの？わたししかい。じゃあなによ。なに歌う

女 みんな勝手にやっていた。寝たり、飲んだり、今日は一晩中開けてるっていつから。わたしも飲んで、もうみんなの相手をするのも嫌になって、こういうとき旦那がいれば楽なんだけどなあ、話しててくれるんだけど。携帯電話まだ通じない。あいつ大丈夫かなあ。パソコンをつける。適当にいじる。「中野駅ちかく、帰れなくて困ってる方、狭くても大丈夫なら一晩中あいてますんでおこ

してください。お酒あります。」エンター。もう地震とか余震とか津波とかやめてくれよ。ニュースサイトはこわい

女 こわい

女、歌いだす。

女 あなたーのもえるてでー、わたしーをだきしめてー、  
ただふーたりーだけーでー、いきてーいーたーいーのー、  
ただいーのちのかぎりー、わたしーはあいしたいー、  
いのちーのかーぎりーにー、あなたーをーあーいーしーたーいー、  
あなたーをーあーいーしーたーいー

電話の音。

女 もしもし。通じたね。うん。ああ、家には電話した？家の電話なら大丈夫みた  
いね。うん、聞いた。いまどこ。……あらあー、そりや大変。高速？大丈夫だ  
ったの。ゆれたとき。うん。うんうん。減速。みんなちゃんとしてんねえ。う  
ん。明日の朝ですかね。お昼かもねー。お店あけてるよお。大繁盛だって、み  
んな帰れないから。や、どこもそうみたいよ。「甲州街道歩いてる方、店の二階  
を提供します！布団も用意しとくんで、いつでも寄ってください！」ね。知っ  
てる？「歩き疲れたら寄ってください。西荻窪駅徒歩5分。お酒はありません  
がお茶あります。」「わたしたち家族は無事です。両親の家の近隣に住んでる方、  
伝えていただけると助かります。」すごいねえ。ここだけいい空気流れてるよ。  
「テレビは地震ばかりでつまらない方、ご来店ください」って書いたツタヤが

ボコボコにされた。文句言われてた。うん。うん。妹とね

女 手をつないだよ。何十年ぶりに。逃げるとき。スロットいつてた。うん。妹も好きだからね。もううちで、寝てんじやないかな。それかテレビ見てるよ。ここもつけてるけど、さつき歌ったから音消しちやっただ

女 なにも壊れてないよ。や。灰皿、割れちやっただ。そんだけ。わたし、なんともない。ここに居る人たちも、なんともない

女 なんともなくて申し訳ないね

電話での会話が終わっている。

女 津波とかいわれてもせんぜんわかんないわ。だから、今だって放射能とかいわれてもせんぜんわからない。せんぜん、それは、とおすぎて。おかしいなあ、触ってるのに。食べているのに。吸っているのに、とおい

女 「恵比寿駅付近で帰れない方へ。ホテルのロビーを開放しています。西口から徒歩三分。寝具あります。」

女 みんな、寝ちやっただなあ

女 「駅から避難場所へ行く方はお年寄りも連れて行ってあげてください。寒くなってるし。心配です。」

女 おトイレいっといたほうがいいんじゃない。寝る前に

女 「渋谷付近にいて帰れない方、高校の体育館を開放しています。水もありません。」

女 子守唄歌ってあげよっか

女 「電力設備が損壊したため、電力供給が不足し、東京も停電になる可能性があります。そうです。いらぬ電源は切ってください！」

女 ……いい夜だった

短い沈黙。

女 それは、いい夜だった。わたしと妹が手をつないだ、それがあった、その日の夜。お客さんたちが眠ってた。よく来るおっさんとおばさんと、はじめて見るおっさんと。歌をうたった。すぐ近くのわたしの家で、妹とお母ちゃんがきくと寝ている。旦那は高速道路から電話をくれた。あんなに長電話したのひさしぶり。パソコンの上で、たくさんの言葉がおどってる。みんなみんないい人たちに見える。ちょっとうれしそうにも見える。いい人でいいなんて、なんてしあわせなんだろう

女 そんな風にも、見える

女 かたくーいだけあいー、もえるーゆびにかみをー、

からまーせなーがらーあー、いとしーみーなーがーらー、  
くちづーけをかわすのー、あいこーそもえるひよー、

わたしーをもーやすーひー、こころーもやすーこーいーよ

女 次の日パチンコ屋にお金を取りに行ったとき、二万だった、わたしはお金だけもらって店員とだけ話して、家に帰った。地震のとき外に出て、みんなで「ゆれてる。ゆれてる。」って言い合った。あのとき隣にいたおっちゃんに、いまだこかで話しかけられたら思うんだろう。「え」って。やめてよ、なんなの、このおっちゃん。だって、ジャンパー着てて、はげてて小汚かった。よくおぼえてないけど、たしか。あの日は「ゆれてる。」って言い合ったけど。でもジャンパー着てて、はげてて小汚ないから。わたし。「え」って、思うんだろう

女 お客さんが、あんなにかわいく見える日はまたくるんだろうか。それはあると思う、これからも。いい夜は、わたしにとっていい夜は、また来る。すばらしい瞬間が。訪れる。旦那と長電話。それもたぶんある。どこかの瞬間で、あいつがわたしを心配して、わたしがあいつを心配して、わたしたちは年のわりに仲がいい。店があるから。わたしに店をやって、向こうがサラリーマンして、サラリーマンより店のが大事でてつだってくれて、わたしたちはだからこれからも大切な時間を迎える

女  
でも

女 妹と、また手をつなぐことはないかもしれない。手なんて、なかなかつないない。もしあるとすれば、それはお母ちゃんのお葬式かもしれない。ちっちゃいころに地震にあったことがある。家族全員無事だった。お母ちゃんと手をつな

いだのかな、妹と？覚えていない。地面がゆれてた。ぐるんぐるんまわって

女 あの夜の下にいる人たちはみんなみんな優しくかった。いい人だった。いい人すぎて嘘くさいぐらい。みんな善意によっぱらってた

女 わたしもよっぱらってた。お酒に酔って、うひゃうひゃいながら笑ってた。旦那からの電話がそうとうキュートだって信じてた。お店を開けて、お店を頼って人が来て。あの夜はいい夜だった

電話の音。

女 もしもし。おお。ひさしぶり。ん、お店。なによ。そーお？相変わらずよお。今日は友だちの娘さんが出てるね、朗読劇だった。まあ、おもしろかった。寝ちゃったんだよね。誕生日？いいわよ、そんな。ありがとう。あんたより年上。いいじゃない、それで。ね、こつち来なさいよ。また。遊びに来てよ

女 ……………そうだね。そつちのが安心、だもんね。お母ちゃん、年だし。余震も、ちよつとあるしね。…………うん。時間あつたらね、いく。や、野菜とかいいから、送らないで。そんなさ、ここ東京だよ？そんな、放射能とか、さ。…………そろそろお客さんくるから、ごめんね。ありがとうね、ほんとうに。お誕生日、ありがとう

電話は切れている。女、静かに、ゆっくり、深呼吸をする。

女  
地震

みじかい沈黙。

女 地震！地震だ。地震だぞ。地震だぞ！

沈黙。

やがて、女は開店のため細々と動き出す。

女、歌をくちずさむ。

女 あなたーをーあーいーしーたーい

了

参考

「愛の賛歌」 作曲…E.ピアフ 日本語訳…岩谷時子

あなたの燃える手で あたしを抱きしめて

ただふたりだけで 生きていきたいの

ただいのちのかぎり あたしは愛したい

いのちのかぎりに あなたを愛したい

頬と頬よせて 燃えるくちづけを

かわす喜び かわす喜び

あなたとふたりで 暮らせるものなら

なんにもいらない

なんにもいらない

あなたとふたりで 生きていくのよ  
あたしの願いは ただそれだけよ  
あなたとふたり

かたくいだき合い

燃える指に髪を

からませながら いとしみながら

口づけを交わすの

愛こそ燃える火よ

あたしを燃やす火

心とかす恋よ